「見えないもの」への恐怖

2020 年 6 月 20 日

中 山 洋 子

2020 年 1 月から始まった新型コロナウイルスによる感染症の問題は、この半年間、私たちを悩まし続けている。2 月の上旬、横浜港に寄港したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の船内で感染拡大が起こったとき、対岸の火事のようにテレビの報道を見ていたが、あっという間に日本国内にも感染は広まり、2 月の下旬には、小中学校の休校や集会の自粛が安倍首相から要請された。当時、中国では新型コロナウイルスの感染拡大が急速に進み、欧米諸国にも拡大し始めて、WHO は、3 月 11 日に新型コロナウイルス(COVID-19)の pandemic を宣言した。日本も 3 月下旬ごろから感染拡大が深刻化し、4 月 7 日には東京、大阪、北海道など 7 都道府県に緊急事態宣言が出され、16 日には、全国に拡大された。患者数の増加に伴い、日本の医療体制に不備が際立ち、マスクや防護服等、医療従事者の基本的な活動に必要な物資にまで不足が生じ、私たち医療従事者は何とかならないかと焦りと危機感を感じた時期である。4 月は危機的な状況にあったが、感染は徐々に収束し、5 月になって緊急事態宣言は解除され、経済活動の自粛も解かれている。だからといって新型コロナウイルスの問題が解決したわけではなく、私たちの不安と緊張感は続いている。

感染症の pandemic は災害である。東日本大震災と福島第一原発事故を福島県住民として経験した私は、新型コロナウイルスの感染拡大によって起こってくるさまざまなことを原発事故での経験と重ねながら自粛生活を送ってきた。ウイルスという日常生活においては目で見ることができないものへの恐怖・不安は、原発事故の放射能への不安を思い起こさせた。とくに新型ウイルスによる感染拡大が始まろうとした時の「正しく恐れる」という言葉は、私の心に突き刺さった。原発事故の時に「正しく恐れる」という言葉が、住民を翻弄させたからである。

測定は可能であっても目に見えないものに対する不安・恐怖は、放射能もウイルス感染も共通しているように思う。原発事故後、福島県というだけで放射能を持ってくると言われ、福島県沿岸部（浜通り）の被災地には、支援物資を積んだトラックさえも入ってこなかった。ある薬剤師さんは、不足している薬品をネットワークで呼びかけ、全国から集めることができたが、福島県には持っていけないと言われ、隣県まで自家用車で取りに行ったと語っている。また、被災家族を県外の避難先に送り届けたタクシー運転手も、途中のドライブインの駐車場に止まれば、福島ナンバーということで嫌がらせを受けたと述べている。放射能が感染症と同じようにうつるという偏見と風評被害が福島県民を苦しめた。それと同じようなことが新型ウイルスの感染拡大に伴って起こっている。各自治体もホームページに、「感染者や医療従事者等、またそのご家族が、いわれのない差別や偏見にさらされることがないよう、感染症に対する正しい知識が大切です」と協力要請を掲示している。

科学的根拠をもって放射線物質や放射能のことを正しく理解するということ、すなわち、「正しく恐れること」は、偏見、差別、風評被害をなくすために重要なことであることは言うまでもない。しかし、科学的根拠に基づいて示された数値をどのように解釈するのかは専門家に委ねられている。福島原発事故のときの「これまでの経験したことのない低線量の被爆」は、住

民の健康にどのような影響を及ぼすかについては誰にも分からなかった。広島、長崎の原爆投下やチェルノブイリ原子力発電所事故等、過去のデータに基づく推測から、住民が受ける放射線量について「安全」と「安心」のために説明しようとした数々の専門家の言葉は、正確ではなかった。なぜならば、これまでにない初めての経験は、既往の知識を当てはめることができず、「誰にも分からない」未知のことなのである。

今回の新型コロナウイルスの感染症も治療薬がなく、どのような経過をたどるのかも今現在の経験からしか分からず、いまだ手探りの状態にある。新型コロナウイルスの感染拡大について、専門家たちはデータを用いて説明し、確かな情報を得て正しく恐れて賢明な行動をとるように求めている。あるホームページを開くと国際感染症センター長の言葉として「様々な情報や憶測が飛び交う中、冷静な行動が必要です。そのためにはまず、事実をきちんと知ることです。私は厚生労働省 HP の「Q & A」を薦めます。絶対にうそがあってはならないファクトチェック（事実の検証）が非常に厳しく、信頼できます。」と掲載されている。国や自治体が示すデータを信じられるのか、そのデータを解釈・解説する科学者たちの言葉を信じられるのか、そこには「信頼の条件」があるように思われる。

災害の基本は、「自分の命は自分で守る」である。しかし、感染症のウイルスは、自分の眼で確かめることができないだけに、「目に見えない恐怖」から、国の方針に従わざるを得ないところがあり、それがマスクの着用や不要不急の外出自粛という行動につながっている。第二次世界大戦を知っている世代は、こうした国民の行動をみたときに、戦時下を思い出すというが、それは私たちにも容易に想像がつくことである。国の方針によって国民が同じ方向に向き、そこから外れれば、バッシングされるのである。さらに、目に見えないウイルス感染という恐怖は、人間に生命と社会の危機を引き起こし、否応なしに社会のしくみを変えていく。新型コロナウイルスの感染対策によっても働き方・学び方等、私たちの身近なところでのしくみが変わり、人々の関係のあり方にも変化をもたらしつつある。変わっていく社会のしくみや規範に対してどのように向き合っていくのか、新型コロナウイルス感染症の恐怖によって、私たち一人ひとりの価値観が問われているように思う。

＜参考文献＞ 景浦 峡, 信頼の条件：原発事故をめぐることば, 岩波書店, 2013.